

ごあいさつ



公益社団法人 日本WHO協会
理事長 関 淳一

今年も、日本列島の各所で、桜の季節も終り、新年度が本格的にスタートしました。

昨年は、特に春以後、西アフリカでのエボラウイルス症の outbreak が世界中の国々に改めて感染症対策の見直しを求める結果となりました。私は、「もはや一国では国民の健康を守れない」と言うWHO出発の原点を見ている様に感じました。同時に、マスメディアによる連日の報道を見て、国民一人、一人が感染症に対する正しい知識をもち、正しい情報に基いた、冷静な判断を求められていることを強く感じました。

この様なことを踏まえ、去る2月12日に、大阪において「感染症 正しい知識と予防」というタイトルでのフォーラムを開催し、安井良則先生と砂川富正先生に、御講演いただきました。今回、その時の御講演の内容を本誌に掲載させて頂きました。是非参考にして頂きたいと思います。

更に、この度リベリアにおいて、WHO労働安全衛生コーディネーターとしてエボラ対策に従事され2月末に帰国された労働科学研究所の吉川徹先生に現地での御経験について御寄稿頂きました。吉川徹先生には帰国されたばかりの極めて御多忙の中、御執筆頂き厚く御礼申し上げます。

ところで、WHOの今年の世界保健デー(4月7日)のテーマは「食品安全」でスローガンは「あなたの食べ物はどれくらい安全ですか」です。このテーマが選ばれた背景について、マーガレット・チャン事務局長は、今や私達の食卓の上の食べ物の材料や加工の過程はグローバル化しており、国際的にも又各国においても食品由来の疾病の予防に対する体制の確立が必要であると述べています。

今回、我国のこの方面への取組の全体像について、内閣府食品安全委員会の姫田尚事務局長に、食品安全委員会設立の経緯や求められている使命等について、御寄稿頂きました。皆様と共に今後の参考にさせて頂きたいと思っております。

そして、私共が健康に生きていく為の基である日常の食について、この際皆で少

し立ち止って考える機会にしたいと考えて、大阪青山大学の東根裕子教授を講師にお迎えし、「食と健康」をテーマとしたフォーラムを開催致します。

去る2月13日から3日間にわたり、日本歯科医師会とWHOの共催による「世界会議2015」が東京国際フォーラムにおいて開催されました。この世界会議は、急増する高齢者の健康を守る為に、今後の歯科医療、口腔保健のあり方を考える一つのステップとして、同じ課題に直面する多くの国の人々が一堂に会し議論することを目的に、日本歯科医師会の提唱で開催されました。テーマは「健康寿命延伸のための歯科医療・口腔保健」でした。

大久保満男日本歯科医師会会長は、日本人の平均寿命と健康寿命の格差の現実とそれに伴って起っている高齢者の実態等について、日本の公的医療保険制度との関連についても触れながら問題提起をされました。WHOを代表して、B.W.Bettcher生活習慣病予防部長が「21世紀における生活習慣病予防とコントロール-WHOの戦略」と題して、開会特別講演をされ、その中で口腔保健の推進との関連について述べられました。24ヶ国の参加のもと各々の国の立場で率直な議論が行われ、大久保会長のリーダーシップのもとで極めて有意義な世界会議でした。

この度、WHO西太平洋事務局における6ヶ月のインターンシップを終えて3月末日に帰国された、群馬大学大学院保健学研究科准教授の吉田朋美先生にマニラでの御経験について御寄稿頂きました。多職種連携教育をテーマとした、6ヶ月間の充実した研修の成果を拝読し私共協会としてインターンシップへの助成事業を更に充実せねばと強く思いました。

終わりに当り、今回「目で見えるWHO」57号を発行するに当り、御協力賜りました皆様に改めて、協会を代表して、心から御礼を申し上げます。